

## 中世神道 = 「日本のヒンドゥー教」?

### 要旨

二〇〇七年四月二九日 コロンビア大学 中世神道ワークショップ

彌永信美

目次：

はじめに

成尊の『真言付法纂要抄』と安然

安然と第六天魔王神話

安然と「梵天王思想」

安然と「伊舎那 = 伊弉諾」説

安然の天部思想と初期中世神道

平田篤胤『印度蔵志』と初期中世神道

結論

神道は有神論的宗教だろうか。本報告は、この素朴な問いへの一つの解答の試みとして捉えることもできる。中世神道が、仏教、とくに密教の圧倒的な影響の下に生み出されてきたことは、多くの革新的な研究によって明らかにされてきた。仏教はインド以来、土着の神々の存在は否定しなかったが、至上神による宇宙の創造、という（ヒンドゥー教的な）観念は、一貫して否定してきた。ところが、（仏教から生まれてきたはずの）中世神道は、宇宙の始原を問い、さまざまな創造神話を産出し、世界が神々によって支配され、動かされる、という強い有神論的な観念を生み出してきた。宇宙の究極的な根拠を定め、権威の根源を定位することが、中世神道の思想的課題だったといえる。それは、中世神道の母胎とも言える日本の密教が、古い仏教とは大きく異なり、いわばヒンドゥー教とも非常に近いある種の有神論的傾向をもつ（あるいは少なくともそれを容認する）体系となっていたから、とは言えないだろうか。

こうした仮説のもとに、中世神道の「母胎」を遡り、その一つの重要な出発点となったと思われる成尊の『真言付法纂要抄』（1060年）の一節を分析すると、そこには、安然の思想の影響が明らかに見て取れる。そこで、安然のいくつかの著作（『真言宗教時義』第四巻の天部について論ずる一節、『悉曇蔵』第一巻の文字の起源神話を語る部分、「摩利支天要記」と題された逸文）と中世神道のおもに天部について述べる言説を比較すると、いくつかの明らかな一致点が見えてくる（第六天魔王神話や梵天王思想、またおそらく「伊舎那 = 伊弉諾」説、など）。さらに、とくに『真言宗教時義』第四巻の一節にみられる天部の思想は、全体として、中世神道の神々についての観念と重要な類似点をもっていると考えられる。このように考えれば、安然においてとくに顕著に現われているような密教的 / 本覚思想的な天部についての思想は、有神論的な中世神道を生み出す母胎となりうる条件を備えていたのではないか、と思われてくる。

そのことは、遠く時代を隔てて、江戸時代の平田篤胤の思想からも、逆説的に確かめることができる。篤胤は、密教は、表面的には「仏教の装い」を施してはいるが、本質的には「梵天の古伝」、すなわちインド神話やインドの宗教であると考えた。そして、仏教の典籍の中からインド神話を探し出して、それが日本の神話（篤胤にとっての神道）と同じものであることを証明しようとした。しかもその結論として篤胤が提示したのは、中世神道の「梵天王思想」ときわめて類似した神学体系だった。そのことは、逆に言えば、篤胤が構想した「神道」が、篤胤自身の意識的な意図とは関わりなく、非常に中世神道に近いものだったことをも意味しているといえる。